

中世芸術論 謡曲・能〔世阿弥自筆本〕狂言

萩原 義雄

はじめに

室町時代の言語文化で將軍家庇護の許に培われる藝能には、共通した産みの苦しみが潜んでいる。時の権力者が目をかけない多くの座興は果てなく消滅していく。しかし、一度眼鏡に適ったものは、次への発展性が見込まれ大きく広がりを見せていく。受容性の高い芸論こそが常に認められ、その骨格を明らかにしてきた。どんなに優れた芸術でも、此を容認して時の人に絶賛され後援してもらえねばただの代物にすぎないことは今の世でも同じである。ここでは、この室町時代に花咲いた謡曲・能・狂言による当世言語文化について今回は考察してみよう。

謡曲百番の「枕慈童」

シテ 慈童仙人

ワキ 漢皇帝臣下

ワキ次第(三人)「山より山の奥までも。／＼。道あるや時代なりけり。ワキ詞「そも／＼これは漢の皇帝の臣下なり。偕も此程南陽の^{シキ}酈^{シキ}の山の麓より。菓の。水流れ出づ。其水上を見て参れとの宣旨を被り。唯今山路に赴き候。道行三人「心なき。山がつまでもたふとみて。山賤までもたふとみて。迎へ靡くや草惹さへもなくして速に。分けつゝ行けばほどもなく。尋ぬる山に着きにけり／＼。ワキ詞「これは早酈^{シキ}の山に着きて候。此谷川は菓の水にて候ふべし。岸に添ひて水上を尋ねばやと存じ候。シテサシ「山・^ニハ^ニイダ」として霜侵せる紅樹。水・^ニ回^ニエイカイ」として露潤す黄菊。あら面白のをりからやな。ワキ「不思議やな。是なる菴の内を見れば。いと美しき童子あり。そも御身はいかなる

- 1 -

人ぞ。シテ「われは周の代に慈童といつし者なり。さて又御身は何のため。この深山には分け入り給ふぞ。ワキ「これは漢の皇帝の臣下なるが。菓の水の水上を尋ねよとの宣旨を被り来りたり。まづ／＼かの周の代は。八百年の昔なるに。しかも妙なる童子の姿。こはそもいかなる事やらん。シテ「われ古あやまつて。御枕を越えしによりこゝに移さる。然れども我が君猶浅からぬ御恵。御枕に妙文を記しまして賜はりぬ。さればわれこの水を以て。菊の葉にかの妙文を写し流に浮むれば則ち菓の水となつて。寿命を延ぶるのみならず。神道を得て。樂のみに暮せるなり。詞「まづ／＼これなる御枕。拜み給へや人々よ。ワキ「これは不思議の事なりと。各立ち寄り御枕の。妙文を押し奉る。シテ「いで／＼舞樂を奏しつゝ此まれ人を慰めんと。地上歌「西に向ひてうち招けば。／＼。崑崙山に住居なす。王母にかしづく仙女の数数樂器を手に手に携へて。雲に乗じて忽ち来り。聞きもなれざる仙菓を奏せば。慈童は立ち出でて。舞をかなづる姿も。たをやかにおもしろや。菓「本より菓の水なれば。／＼。其身も変らず八百歳を。既に経たりや猶ことぶきは。限あらじな。限あらじな此御菓を。奉らんと。玉の甕を取り出でて。菓の水をみづから汲み入れ勅使にこれを捧げつゝ。処は酈^{シキ}の山路の菊の水。汲めや掬べや飲むとも尽きじ。汲めや掬べや飲むとも尽きせぬ。齡を延ぶる。めでたさよ。

※「菊の水」<http://www.plantaree.gr.jp/academic/essay-ono-yoshirou-01.html>
小野 芳朗(岡山大学環境理工学部助教授)さんのエッセイが参考になる。また、梵舜本『太平記』巻第十三・龍馬進奏の事「古典文庫所収」にも同譚を引き、これを『壺囊鈔』が引くことを確認している「近思文庫編輯『日本語辞書研究第2輯』に、拙論『壺囊鈔』巻第一「五節供」の典拠資料について——『東山往來』『拾芥抄』『太平記』『下學集』等からの引用姿勢—参照」。謡曲『猩々』では、「……菓の名をも菊の水、盃も浮かみ出でて、友に逢ふぞ嬉しき……白菊の着せ綿を温めて、酒をいざや酌まうよ」と綴る。現在、酒銘の名に「菊水」が知られる。

- 2 -

能・狂言

参考資料：「能とは」「狂言とは」を読みましよう。

能の拍子理論

狂言演目「舟船」について

1, 狂言「舟船」〔古典大系本〕

シテ 太郎冠者 狂言上下・着付・縞熨斗目

アド 主 長上下・着付・段熨斗目・小サ刀

主 これはこのあたりに住まい致す者でござる。この間は久しゅういずかたへも出ねば、心がして悪しゅうござるによつて、今日はどれへぞ、遊山に参ろうと存ずる。まず太郎冠者を呼び出だいて談合致そう。

ヤイヤイ太郎冠者あるかやい。太郎冠者 ハア。主 いたか。太郎冠者

お前におります。主 念無う早かった。汝を呼び出だすは別なることでもない。この間は久しゅういずかたへも出ねば、心が屈して悪しいによつて、きようはどれへぞ、遊山に行こうと思うが何とあろうぞ。

太郎冠者 御意なくは申し上げようと思つて存ずるところに、これは一段とようござりましよう。主 さりながら、このあたりはおおかた見盡くいたによつて、きようはどれへぞ、珍しい所へ行きたいものじや。太郎冠者

まことにこのあたりは、おおかた御見物なされましたによつて、今日はどれへぞ珍しい所へ、お供致したいものでござる。主 汝分別をしてみよ。太郎冠者 畏つてござる。どこもとがようござりましようぞ。

主 どこもとがよからうぞ。太郎冠者 イヤ、西の宮へお供致しまし

よう。主 その西の宮という所は景のよい所か。太郎冠者 つつと面白

い所でござる。主 それならばおつつけて行こう。太郎冠者 ようござりましよう。主 汝は供をせい。太郎冠者 心得ました。主 サ

アサア来い来い。太郎冠者 参ります参ります。主 さてその西

の宮という所は、景のよい所か。太郎冠者 浦山をかけてござれば、浦で網を引かせらりようと、山で狩をなさりようと、おぼしめすまの所でござる。主 それは一段の所じや。イヤ、来るほどに、大きな川へ出た。これは何という川じや。太郎冠者 こなたはこの川を御存じござらぬか。主 イイヤ何とも知らぬ。太郎冠者 これは神崎の渡しと申して、かくれもない大河でござる。主 ハハア神崎の渡しというのはこの川のことか。太郎冠者 さようでござる。主 して乗る物でもあるか、ただしかち渡りか。太郎冠者 いつもこのあたりに乗る物でござる。行て見て参りましよう。主 早う見て来い。太郎冠者 畏つてござる。

太郎冠者 いつもこのあたりに、乗る物があるが、きようは何として見えぬことじや知らぬ。イヤ、つつと向こうに見ゆる。急いで呼ぼう。

ホーイ、ホーイ、ふなやい。ホーイ、ふなやい。ホーイ。主 ヤイヤイ太郎冠者。ふなと言つては來ぬほどに、ふねと言つて呼べ。太郎冠者

こなたの御存じないことでござる。私にまかせておかせられい。主 これはいかなこと。太郎冠者 ホーイ、ふなやい。ホーイ、ふなやい。

ホーイ。主 ヤイヤイ、ヤイ太郎冠者。太郎冠者 何事でござる。主 ふなと言つては來ぬほどに、ふねと言つて呼べと言つに。太郎冠者

私の前ではようござるが、おのおの前でそのようなことを仰せられたならば、恥をかかせらりよう。主 何と恥をかこうとは。太郎冠者 古歌

にもふなとこそござれ、ふねとはござりますまい。主 推參な。汝が分として古歌だてを言いおる。さりながら古歌にあらば詠め。太郎冠者

畏つてござる。「ふな出して、跡はいつしか遠ざかる、須磨の上野に秋風ぞ吹く」。何とふなではござらぬか。主 それはさだめてふねでか

なあろう。太郎冠者 こなたの分として、この古歌を直させらるること

は成りますまい。主 それならば某が方には、ふねと詠うだ古歌がある。太郎冠者 あらば早う詠ませられい。主 心得た。「ほのぼのと、明石

の浦の朝霧に、島がくれゆくふねをしぞ思う」。何とふねではないか。太郎冠者 それはさだめてふなでござりましよう。主 汝が分と

して古歌を直すことは成るまい。 太郎冠者 私の方にはまだござる。

主 あらば早う詠め。 太郎冠者 畏つてござる。「ふな人は、誰を戀うとか大島の、浦かなしげに聲の聞うる」。何とふなではござらぬか。主

それもさだめてふねでかなあろう。 太郎冠者 こなたの分として、古歌を直させらるることは成りますまい。主 某が方にはまだある。

太郎冠者 あらば詠ませられい。主 さりながら、今度はこちら早う詠まねばならぬ。 太郎冠者 早うなりと遅うなりと詠ませられい。主 心得た。「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆくふねをしぞ思う」。

何とふねではないか。 太郎冠者 さては、こなたのことござる。主 何とこなたのこととは。 太郎冠者 「藪にも晴れにも歌一首」と申すが、それは最前の歌でござる。主 最前のと歌は一つなれども、最前のは人丸の歌、今のは猿丸大夫の早歌というて、作者が違うてあるいやい。 太郎冠者 いかにか作者が違うても、歌は一つでござる。それまでも

ないこと。あなたの着き場と、こなたの着き場は何と申す。主 それはふふ、ふね着きよ。 太郎冠者 ふな着きとこそござれ、ふね着きとはござりますまい。その上私の方にはまだござる。主 あらば早う詠め。

つ鳴くは都鳥かも」。何とふなではござらぬか。主 まずそれに待て。 太郎冠者 心得ました。「ふなきおう、堀江の川のみなぎわに、來居つ

る古歌穿鑿を致してほうど詰まった。何と致そう。イヤ、謠で詰みようと存ずる。主 ヤイヤイ太郎冠者。某が方には、ふねと謠う謠があるが、汝が方にもあるか。 太郎冠者 こなたの方にござれば、私の方にもござる。あらば早う謠わせられい。主 心得た。山田矢走の渡し舟

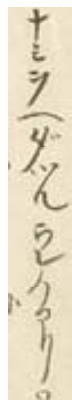
の、夜は通う人なくとも、 太郎冠者 イヤ、一段のことを謠い出だされた。あとで詰みようと存ずる。主 月の誘わばおのずから、ふねもこがれて出ずらん、ふ。 太郎冠者 のう主。主 何と。 太郎冠者 へふな人もこがれ出ずらん。主 なんでもないこと、しさりおれ。 太郎冠者

ハアー。主 エーイ。 太郎冠者 ハアー。

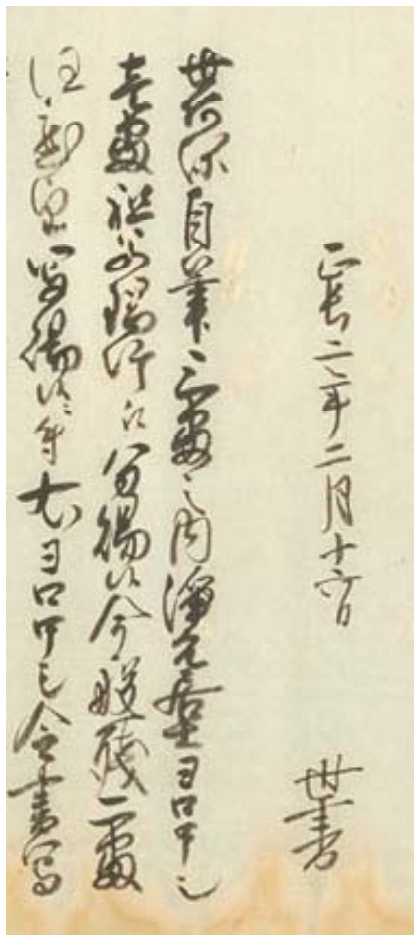
《コラム：濁点》濁点は西暦一〇〇〇年頃から佛教関係の漢文資料に見え始める。鎌倉時代になると、仮名で書かれる文献資料にも登場してくる。ただし、形態は一定ではなく、濁点を付ける位置も多様である。やがて、仮名の右肩に二つの点を打つ形態が室町時代の世阿弥自筆の能本『世阿弥自筆能本集』影印篇・校訂篇、岩波書店刊↓「生駒山宝山寺、奈良女子大学「弱法師」参照」に現れ、それが社会一般に通用して、定まった用字となっていくのは江戸時代以降になる。半濁点も江戸時代初期に見え出す。



ワウジノヂウリヨ



ナミヲヘダツル

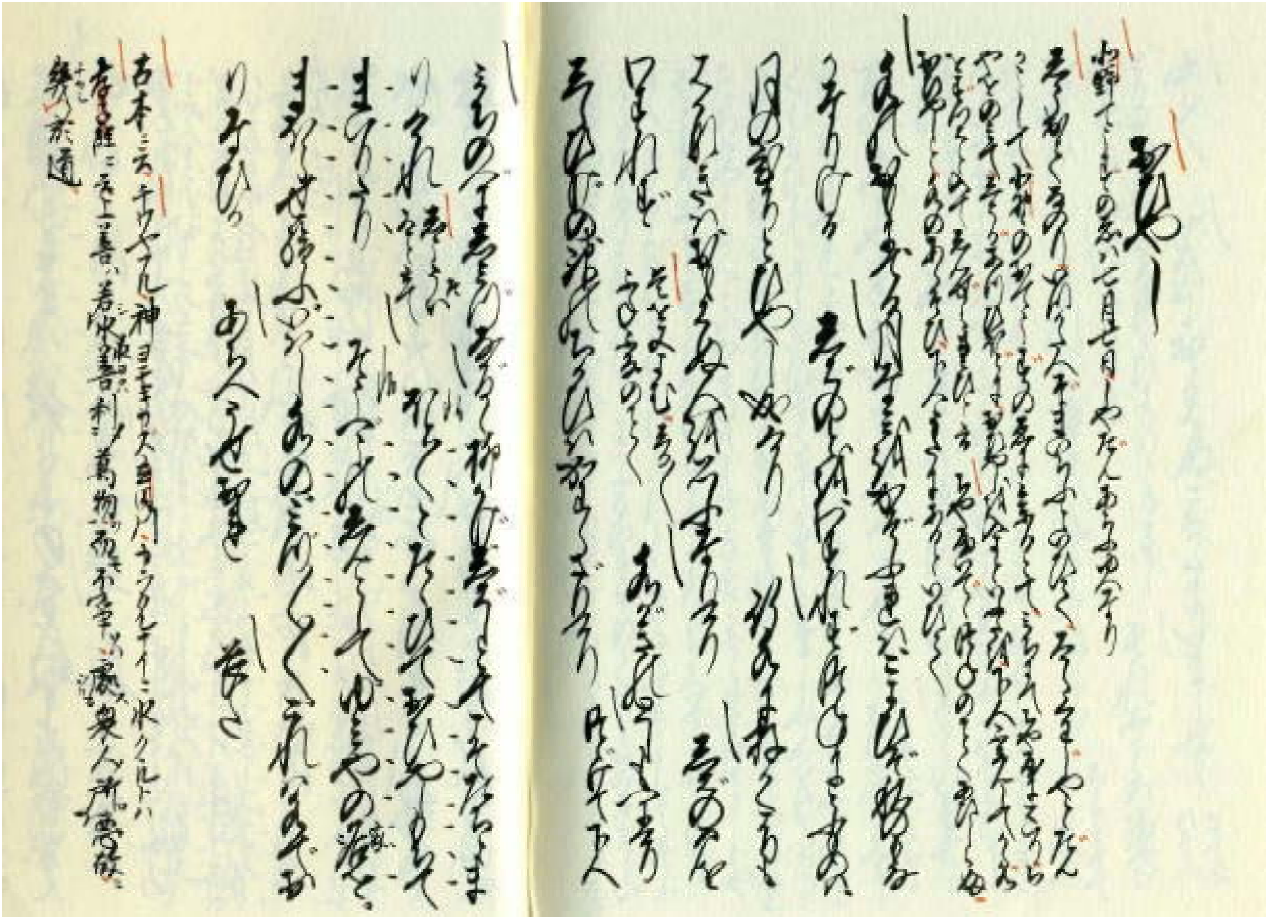


舟ふな

いあかりもまぬあまのうのてにさかひあかばいへ
へも遊山にまいらぬほどに、のさものをよび出し、だんかう申、いつか
たへぞゆさんに参らばやとぞんずる。 《下人よび出し下人爰元は、
いつれもみさせられたほどに、ちとにしのみやへござれ、おもしろき所
じやほどにといふて、にしのみやへ行、みちにて、かんざきのわたりを
み付て、ふねをよぶとき、ふなよふといふてよぶ、しうふなとはいはぬ
ものじやといふところ、二どよび二どめに哥にもふなといふうたあり
といふ、さらハよめと云て、此哥よむ也 《太郎冠者 下人出
とはいつしかとをさかる、すまのうへ野に秋風ぞふく、あなた乃つきば
とこなたのつきバハ、何と申ぞ 《主 下人 下人出
きとこそ申せ 《主 下人 下人出
くれ行ふねをぞぞ思ふ 《太郎冠者 下人出
に、きみつなくは都鳥かも 《しう又、ほのくとのうたよむ、
下人けにも、はれにも哥一つとハ、たのふだ人の事じやと云、しう是ハ
さるまる太夫のうたじやといふ 《太郎冠者 下人出
か大島の、うらかなしげにこゑのきこうる 《しううたひに有と云
《主 下人 下人出
ハ、おのつから、舟もこがれていつらん 《太郎冠者 下人出
《主 下人 下人出
ひ事あちへうせおれ 《太郎冠者 下人出
とふ 下人出
※「課題」「おひやし」の影印資料転載しておきますので、これを活字
にしてみましょう。

大蔵流・鬼類小名
舟ふな

《主 下人 下人出
へも遊山にまいらぬほどに、のさものをよび出し、だんかう申、いつか
たへぞゆさんに参らばやとぞんずる。 《下人よび出し下人爰元は、
いつれもみさせられたほどに、ちとにしのみやへござれ、おもしろき所
じやほどにといふて、にしのみやへ行、みちにて、かんざきのわたりを
み付て、ふねをよぶとき、ふなよふといふてよぶ、しうふなとはいはぬ
ものじやといふところ、二どよび二どめに哥にもふなといふうたあり
といふ、さらハよめと云て、此哥よむ也 《太郎冠者 下人出
とはいつしかとをさかる、すまのうへ野に秋風ぞふく、あなた乃つきば
とこなたのつきバハ、何と申ぞ 《主 下人 下人出
きとこそ申せ 《主 下人 下人出
くれ行ふねをぞぞ思ふ 《太郎冠者 下人出
に、きみつなくは都鳥かも 《しう又、ほのくとのうたよむ、
下人けにも、はれにも哥一つとハ、たのふだ人の事じやと云、しう是ハ
さるまる太夫のうたじやといふ 《太郎冠者 下人出
か大島の、うらかなしげにこゑのきこうる 《しううたひに有と云
《主 下人 下人出
ハ、おのつから、舟もこがれていつらん 《太郎冠者 下人出
《主 下人 下人出
ひ事あちへうせおれ 《太郎冠者 下人出
とふ 下人出
※「課題」「おひやし」の影印資料転載しておきますので、これを活字
にしてみましょう。



世阿弥『風姿花伝』

テキストデータ「http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/xt_fushikaden.txt」

として、私自身講義支援資料としてネット上に記載しているので参照いただくありがたい。また、影印資料も寶山寺貴重資料電子画像集『[風姿花伝](#)』が公開されている。

《参考資料》

※小林千草・千 草子著『ことばら迫る能(謡曲)論』—理論と鑑賞の新視点—〔武蔵野書院・二〇〇六年一月七日刊〕〔巻末附録〕にある「能(謡曲)の基礎知識と発展問題」は、必読箇所である。また、「はじめに」のところ、本書の読み方に一〇選択が示されていて、たとえば、⑧番目には、「日本語史(国語史)のレポートを能(謡曲)で書きたい↓Iからどうぞ」云った具合に示され、このIは、「啓蒙的なものから、やや専門的なものもあり、学生たちがレポートや卒業論文を書く際の参考としていただければと思っている。章立て構成がきっちりとして注のつくものから、エッセイに限りなく近いものもあるが、一口にレポートと言っても、さまざまな色合いがあるから、このようなアレンジメントも、時には役立つこともあるものと思う」とコメントしている。そして、声に出して本文を読むことを示唆している。このことは、私が示したこの資料においても同様のことでもある。